日１４－１１７ （ショートコメント）

「海を感じる時」 ✿✿✿

２０１４（平成２６）年9月2
１日鑑賞<テアトル梅田>

監督：安藤尋
原作：中沢けい『海を感じる時／水平線上にて』（講談社文芸文庫刊）
恵美子（愛を知らない少女）／市川由衣
洋（恵美子の高校時代の新聞部の先輩）／池松壮亮
とき子（恵美子の後輩）／阪井まどか
恵美子の母親／中村久美
恵美子が夜中に知り合う男／三浦誠己
２０１４年・日本映画・１１８分
配給／ファントム・フィルム

◆思春期の少女の「性」をテーマとした小説や映画はたくさんあるが、現役女子高生だった中沢けいが１９７８年に発表し、第２１回群像新人賞を受賞して大きな話題を呼んだのが、本作と同名の原作だ。そう言われると、何となくそういう話題があったことを思い出すが、当時弁護士登録４年目で、土、日、祝日なし、平日は毎日１１時頃まで働いていた私にはそんな小説を読む暇など全くなかった。しかし、そんな４０年近く前の小説が、なぜ今映画化？
　最近の邦画の若者の恋愛モノにはとんと飽きていた私だが、予告編を観ると、ヒロイン恵美子を演じる市川由衣がかなり刺激的なヌード姿を披露してくれているので、一応観ておかなくちゃ。そう思って劇場に入ったが、当然のようにパンフレットを買わなかったのは、正直言って、頭のどこかに退屈でつまらない映画かも・・・という思いがあったため・・・。

◆映画のストーリーは、新聞部の部室で「朝日ジャーナル」の毛沢東の記事を読んでいる女子高生の恵美子が、３年生の先輩・洋（池松壮亮）から突然キスを迫られるところから始まる。こんな時、「僕はずっと君のことが好きだったんだ」という「告白」の１つも伴うのが普通のルールだが、洋の場合は「ただ女の人の体に興味があっただけ」というからビックリ。なるほど、これが当時恵美子と同じ女子高生だった作家・中沢けいの体験だったわけだ。普通はそんな迫り方をされれば、「私をバカにしないで」と拒絶するところだが、さて恵美子の場合は・・・。
　本作の脚本を書いたのが『戦争と一人の女』（１３年）（『シネマルーム３０』１９９頁参照）の脚本を書いた荒井晴彦という情報にはビックリ。私より２年先輩のおっさん（おじいさん？）に、恵美子のような女子高生の性の芽生えがわかるの？私にはサッパリわからず、イライラするだけだったが・・・。

◆私は１９６７年から７１年までの学生時代をいわゆる木賃アパートで過ごしたが、当時の学生は、よほどのことがなければ、「ラブホテル」などという洒落た場所（？）に行く金はなかったから、女の子とのエッチは自分のアパートでやっていたはず。東京の大学に進んだ洋が住んでいるのも青木荘という木賃アパートだ。東京で就職した恵美子は、そこに日毎やってきてエッチをくり返しているが、そんな時は、安モノアパート特有の音の漏れに気をつかうはずだ。他方、恵美子の方はもう少しマシなアパートに住んでいるようだが、恵美子を女手１つで育てた母親（中村久美）が訪問して鯖のさばき方を教えているところに、あえて洋が登場してくると・・・。
　原作の雰囲気を生かすため、あえて時代設定を１９７０年代にしているのが本作の特徴だが、洋の部屋はいつもあんなに小ギレイなの？その部屋の中での修羅場のような痴話ゲンカは、隣の部屋との関係上いかがなもの？等々のくだらないことを含め、私には洋と恵美子との男女関係（セックス関係）の綱引きには全然興味が持てない。したがって、本作鑑賞中は、あくびばかり・・・。

◆母親がセックスをしたから、娘の恵美子が生まれた。それはまちがいない。しかし、その母親から、「ふしだらな娘！」とののしられ、叩かれる中で、あえて「せんべい」をかじって見せたり、ある時は娘が母親に対して「私だって女よ」としみじみと語りかける、という母娘関係も私にはサッパリわからないから、イライラするばかり。キネマ旬報１０月上旬号の「ＲＥＶＩＥＷ　鑑賞ガイド」でモルモット吉田氏は、「娘を切り裂く言葉が強烈な母を演じた中村久美は助演女優賞ものだろう」と書いているが、こんな何とも痛ましい母娘のシーンを映画として楽しむことができるのは、さすがプロの映画評論家・・・。
　また、母親が今にも海に飛び込んで自殺しかねない勢いで、死んだお父さんに対してグチをこぼすシーンも、弁護士としてそんな争いごとを４０年間も見てきた私には、バカげているとしか言いようがない。そんなときの弁護士としてのアドバイスは、「娘だってもう１人前なのだから、仕方ないでしょ」というものだが、ここまでヒステリックになってしまった母親には、そんなアドバイスが通じないことは明らかだ。

◆本作前半から中盤にかけては、「ウーマン・リブの時代」、「女の自立の時代」とは正反対の恵美子の生きザマ（？）が描かれていく。しかし、なぜか映画後半では洋と恵美子のセックスをめぐる力関係（？）は完全に逆転していくから、そこに注目！一人酔っぱらって居酒屋から家に帰る恵美子が、店からつけてきた中年男（三浦誠己）をアパートに連れ込む中、ベッドの上では若干ＳＭじみたセックスシーンも登場する。そしてその数日後の（？）恵美子の洋に対する質問は、「私が、他の男の人とセックスしてるとしたら、どう思う？」という挑発的なもの。女はついこういうことを言ってみたくなる動物なのかもしれないが、私に言わせればこの感覚がすべての、「もめごと」の原因だ。
　しかして、本作のラストシーンは、田舎の母親の家に戻った恵美子が、早朝に１人でスリップ姿のまま海辺に出ていくもの。いくら田舎でも、年頃の娘がそりゃないだろうと思うのだが、さて１人足を海に浸して感じている、恵美子の海感覚（子宮感覚）とは・・・？